HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1921年夏におけるクララ・シェトキンとレーニン
Author(s)	上杉, 重二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 30, 91-100
Issue Date	1977-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29165
Type	departmental bulletin paper
File Information	30_P91-100.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

1921年夏におけるクララ・ツェトキンとレーニン

上杉重二郎

Clara Zetkin und Lenin im Sommer 1921

Jujiro UESUGI

レーニンの指導の下に創立を見た共産主義インタナショナルの最大の支部は，ロシア共産党（ボルシェヴィキ）であった。これはロシアにおいては，すでに大社会主義10月革命の勝利によって，労働者＝農民政府がレーニンを首班としてすでに成立していたことを思えば，むしろ当然のことである。

コミンテルンは資本主義諸国および半植民地，植民地における共産党，革命的労働者党を一つの国際的組織に統合した。これらのなかでドイツ共産党は，ただたんに共産主義インタナショナルの最大の支部であったばかりでなく，ドイツが地理的にヨーロッパの中央部に位置していることや，第1次世界戦争における敗北とヴェルサイユ講和条約によって，ドイツ労働者階級が二重の搾取にさらされていた等の理由により，ヨーロッパ労働運動のなかで特別の役割を果してきたので，これに対してレーニンは終始大きな注意を払ってきた。本学部紀要，第26号および『現代と思想』23号において詳述した1921年3月行動も，たんなる中部ドイツにおける地方的事件としてではなく，むしろロシアを含むヨーロッパ情勢に影響を与うべき事件として，コミンテルンによって受取られた。そのことは，事件の経過にも現れている。それだけではなく，3月行動終結後4カ月ばかりを経てモスクワで開かれたコミンテルン第3回大会は，このドイツの事件を中心的議題の一つとして扱った。ドイツ共産党の側もロシアへ大きな代表団を送ったが，これには3月行動のいわゆる反対派も含まれている。このことは，極めて厳しい批判が3月行動の担い手に対して浴びせられて，共産党内に激しい対立が生じ，危機的状況となった事実を示している。そこで党幹部はこの危機を第三インタナショナルの援助を得て解決しようとした。

コミンテルンもまたその支部であるドイツ共産党の困難な状態を見て，これに援助の手を差し伸べた。ことにレーニンは，ロシア国内のなお大きな政治的・経済的困難にもかかわらず多くの時間と大きな精力を割いて，ドイツ代表団と繰り返して会談した。彼はドイツの情勢をいっそう深く理解し，そして適切な忠言を与えた。

レーニンはことに信頼するクララ・ツェトキンと膝を突き合わせて事態を検討し，彼女に然るべき忠告を与えるとともに，また励ました。彼は第3回世界大会を享けてその夏イエナで開催されたドイツ共産党第7回大会に大きな期待を懐き，これに「ドイツ共産主義者への手紙」[1]を送った。

第3回世界大会は世界情勢についても，それはすべてドイツの政治経済情勢に深く関わっていたが，興味ある討議を繰り広げた。しかし今ここではそこまでは立ち戻らない。レーニン

1) レーニン：ドイツ共産主義者への手紙，全集，第32巻，551-563ページ。

とクララ・ツェトキンを中心として，3月行動をめぐる諸討論を紹介しておく。

クララ・ツェトキンは1920年初秋と，コミンテルン第3回大会を機会として1921年夏にモスクワを訪ね，レーニンとしばしば討議を交した。それは，1924年および1926年にそれぞれ2部に分かたれて刊行された『レーニンの想い出』のなかに記されている。従ってこの回想記は，国際労働運動の，そしてまた世界最初の労働者＝農民国家の最高指導者の，日常の生活風景を書き留めたというものではない。極めて政治的な文献であった。

彼女はこのなかで3月行動にかんする自分の見解や行動について叙述するとともに，むしろレーニンの意見を忠実に再現することに重点をおいた。1921年夏の訪問の時は，ドイツ共産党は危機的状態にあったのみでなく，彼女自身も極めて困難な立場にあった。

「……わが党の悲観論者たちは，……党が互解し，終熄となる，と予言していた。」[2)]

しかし彼女は冷静に3月行動と党の現状を分析し，勇気をもってレーニンの批判を受け容れ，そしてドイツ労働運動の将来を示したのであった。彼女はまず3月行動について「『このドイツ問題』は，実際には国際的な問題であったし，またその時期においては共産主義インタナショナル自身の問題でもあった」とその国際的な意義を強調した。そして彼女はいわゆる攻勢理論が「3月行動」の土台をなしており，両者は出発点から切り離せない関係だと指摘した。ところがドイツ共産党は，この極左的偏向を含む攻勢理論を正当化したために，コミンテルンは世界の政治経済情勢をあらためて根本的に検討して「勤労大衆の革命的動員と積極化のためのしっかりした土台を獲得しなければならなかった」[3)] と『回想』には述べられている。第3回世界大会においては世界情勢は主としてトロツキによって分析され，他の論者もこれに参加した。彼の情勢判断はドイツ共産党イエナ大会でもしばしば言及された。トロツキの主張をここで詳述することは避けるが，一言でいえば，革命的情勢は続いているか，資本主義は再起不能かという労働運動にとってもっとも重大な問題の一つを分析するにあたって，トロツキはこの時期をすでに革命的戦後危機期とは判断しない。世界資本主義は戦争および諸国の革命の打撃から恢復している，あるいはむしろ地歩を固めたと理解した。クララ・ツェトキンはここで直ちに彼の発言を想起しているわけではないが，少なくともドイツ共産主義者の情勢判断が甘かったことを，このような表現で示唆した。

彼女は3月行動そのものをどう評価したかと言うと，これは「プロレタリアートの闘争ではなくして，誤って計画された，またよく準備もされず，組織もされず，指導もされず，そしてよく遂行されなかった党の行動であった」[4)] と述べて，この行動をもっとも鋭く批判した。と言うよりはむしろ否定的に評価したと言うべきであろう。従って彼女は当然この行動の土台となった攻勢理論とは，徹底的にたたかった。彼女がここで中部ドイツのザクセン州長官ヘールジンクに代表される支配階級による挑発について触れなかったのは，片手落ちだが，右の指摘は少なくともその後半は，まさに的を射ていた。

彼女が終始強調したことは，3月行動と攻勢理論とは不可分だという考え方であって，したがって「多くの同志が『攻勢理論』は非難するが，しかし乍ら「3月行動」は激情的に擁護する」[5)] のは，彼女にとって甚だ腑に落ちないことであった。もちろん彼女は，彼らが社会民主

2) Zetkin, Clara: Erinnerungen an Lenin, Berlin 1961, S. 28-9.
3) Zetkin, Clara: Erinnerungen an Lenin. Berlin 1961, S. 29.
4) Ibid.
5) Ibid. S. 32.

党幹部ヘールジンクに「挑発されたと感じて，その当然の権利を守ろうとした」[5] プロレタリアに率直に同情することを，非難しようとはしなかった。しかし，3月行動が「暴動という堕罪」であるとの認識は変えなかった。

このことは，彼女が暴力一般を否定したことを意味しない。レーニンもこの点で彼女の批判に反論したことはなかった。むしろ彼女の主張を受けて，次のように「口早やにかつ断定的に」語った。

「もちろん戦闘の準備をととのえたプロレタリアの防衛行動と，充分に討議の行われない，党の――より適切にはその指導部の――攻撃的突撃とは，異なったものと判断されねばならぬ。然しながらあなた方，『3月行動の反対者たち』自身も，3月行動がそのようなこと〔プロレタリアの正当な防衛行動〕にならなかったことには，ともに責任があろう。あなた方は幹部会の倒錯した政策とその悪い影響だけを見て，中部ドイツのたたかっているプロレタリアを見なかった。その上レヴィは〔3月行動に対して〕全く否定的な批判を行なった，」[7]

党議長パウル・レヴィは党規律違反の故をもって除名されたが，レーニンは彼の幹部会批判の仕方が悪いと指摘した。実際そのために悪影響がいっそう広まった。

「この批判のために，レヴィには党への帰属意識がないのかと思われ，そして同志たちは批判の内容よりも，その調子によって，恐らくはいっそう憤激した。レヴィの批判は，問題のもっとも重要な部分から党員の注意をそらしてしまった。」

これは実に言葉のもっともよい意味における，良識ある説得であった。さて

「『3月行動』に対して大会が多分どんな態度を取るかと言えば，あなたは，我々が無条件にある妥協の土台を作り出すに違いない，と考えるに相違ない。しかしあなたは私をおどろきと非難をもって見つめるであろう。あなたとあなたの友人とは，妥協を呑み込まねばならない。あなた方は大会の獲物の獅子の分け前を故国に持ち帰ることで，満足せねばならぬ。」

さてこの「獅子の分け前」とは何か。

「あなた方の原則的な政治方針は勝利するであろう。輝しく勝利する。『3月行動』の繰り返しもまた阻止される。大会の諸決議は極めて厳格に実行されねばならない。そのように執行委員会は配慮するであろう。そのことを私は疑わない。」[8]

クララ・ツェトキンは既述のように，3月行動と攻勢理論の不可分を強調したが，とくに後者について次のように述べた。

「(3月行動の狂信的擁護者によって)『攻勢理論』は，革命の新しい福音書のように賞め讃えられた。」[9]

そして彼女は，このような「3月行動」を革命的大衆闘争として祝福し，断乎たる行動を決意した数十万のプロレタリアによって担われたもの」とする「狂信的擁護者」がコミンテルン執行委員会にも，ロシア党やそのほかの支部にもいた，と語った。だからレーニンと話し合う時，彼が「右翼」なのか，「左翼」なのか，と震えながら忍耐を失なって，その答を待った，とも書いている。彼女が

「自分の見解によれば，ドイツの党とコミンテルンとを脅やかしたこの危険――すなわちも

6) Ibid.
7) Ibid., S. 33.
8) Ibid.
9) Ibid., S. 30.

し世界大会が『攻勢理論』の基礎の上におかれるならば，生じ得るであろう危険――についての私の懸念を隠しはしなかった」[10]

そうした時に「レーニンは自信のある，好ましい笑声を挙げて」こう述べた。

「……落ち着きなさい。『攻勢理論家』の樹は，天まで伸びはしないであろう。……これはいったい理論なのだろうか。そんなことがあろうか。それは幻想であり，神秘主義だ。……だからこれは『詩人と哲人の国』で，我が親愛なベラ・クーン* の助けを得て製造されたのだ。彼もまた詩的才能に恵まれた国民に属し，たえず左へ左へと進むことを，自分の義務だと感じているのだ。しかし我々は詩を作ったり，夢みたりすることは許されない。」[11]

彼はベラ・クーンをはっきりと，たしかにユーモアをこめてではあるが，名指したことによって，執行委員会の責任を認めた。彼の攻勢理論に対する批判は，大会そのものにおいても貫かれ，そのためトロツキの報告「経済情勢とコミンテルンの新任務」にかんする討論においても，「コミンテルンの戦術」に対する修正案提出に際しても，「攻勢理論家」はその主張を通すことができなかった[12]。

ベラ・クーンに対するレーニンの批判は，このクララ・ツェトキンとの会話においては，このように穏かなものであったけれども，がんらい彼の「左翼主義」に対してはかなり厳しいところがあった。1920年3月20日のドイツ共産党幹部会の声明に対するベラ・クーンの批判にレーニンは反対して次のように述べた。

「彼はマルクス主義の本質と生き生きとした魂の存している所を迂回している。すなわち具体的情勢の具体的な分析を回避している。もし都市労働者の多数がシャイデマン一派からカウツキ派へと移ったならば，そして（正しい革命的戦術から離れている）カウツキの（独立社会民主）党の内部において，その右翼から左翼へのそれ以上の移行が行われるならば，かかる労働者たちに対して過渡的な措置，妥協的な措置を勘定に入れるという課題を無視することが許されるか。」[13]

右に触れた幹部会声明は，カップ叛乱鎮圧直後における労働者政府樹立にかんするものである[14]。従ってこれに対するベラ・クーンの発言も，彼に対するレーニンの批判も，極めて本質的なものであった。すなわち共産主義政党の基本的な戦術に関わっていた。

さて，レーニンは続けてクララ・ツェトキンに対して，大会の見とおしを語った。

「大会は有名な『攻勢理論』の首をぐるりと廻して，あなた方の見解に応じた戦術を決定するであろう。」

そして彼はそれから実に興味深い表現を用いた。

「しかしそれに対して大会はまた『攻勢理論』の支持者たちに，一片の慰めを恵んでやらねばならぬ。もし我々が「3月行動」を判断するに当って，ブルジョアジーの手下どもに挑発されたプロレタリアがたたかったのだということを，前面に押出すならば，そしてもし我々がその他の点ではいくらか父親らしい『歴史的な』寛大さを施すならば，一片の慰めを恵むこと

10) Ibid., S. 31.
11) Ibid., S. 31-2.
12) Ibid., S. 45.
13) Firsow, F. I.: W. I. Lenin im Kampf um die Festigung der KI zwischen ihrem I. und II. Kongress, Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung. 1/1970, S. 42.
14) Vgl. Dokumente und Materialien zur geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Band VII. 1, Halbband, Berlin 1966, S. 230-231.

は可能である。……我々はまた——それはしかも第一に，かつ主として考えねばならぬことだが——党内外の真に革命的な労働者たちの気分を考慮しなければならない。あなたはかつて私にこういう手紙を呉れた，我々ロシア人は西ヨーロッパ人の心理を少しは理解できるようになるべきだし，人々の顔を直ぐさま固い，ぼうぼうの柴箒で掃くべきではない，と。私はそれを覚えている」

とレーニンは笑い興じた。

「さて我々も『左利き連中』の顔をすぐに柴箒で掃こうとは思わない。それどころか彼らの傷に香油を塗って，痛みを和げてやろうと思っている。彼らはあなた方とともに，第3回大会の戦術をまもなく喜びかつ精力的に遂行するようにならねばならぬ。そのことは，プロレタリアートの広汎な大衆をあなた方の政策の線上に結集し，動員し，そして共産党の指導の下にブルジョアジーに反対して権力を握る闘争に，投げ入れることを意味する。」[15]

「左翼」急進主義者に対するレーニンの態度は，このように妥協を許さぬ断乎たるものであった。彼らを統一戦線政策遂行のための，最悪の障害物の一つと見做した。けれども彼が彼らの傷に香油を塗ってやったり，一片の施し物を恵んでやったことは，あたかも執行委員会が彼らに対して寛大であったかのような印象を広めたのではあるまいか。それはコミンテルン第3回大会に続いて開かれた，ドイツ共産党第7回大会におけるさまざまの困難に反映しているように思われる。

クララ・ツェトキンは彼の発言に対して，もちろん多少の冗談を含めて，しかしやはり真剣に，レーニンは自分にも「一片の慰めを恵んで」くれようとしているのではないか，と質ねたが，彼の戦術はある意味ではなかなか際どいものであった。

ベルリン反対派の問題は，したがって彼の心に残った。1922年末第4回世界大会が終ったとき，彼はこのドイツ党の婦人指導者を訪ねて，「ところで，あなたの党の反対派はどうなっているか」と質ねた。クララ・ツェトキンは，彼らが第4回大会において第3回大会の態度を修正させようと考えていたこと，また「第2回大会に帰れ」が彼らのスローガンであることを語った。レーニンはこの「無類の素朴さ」を興じた。そして陽気な調子でこう叫んだ。

「『左翼』の同志たちは，共産主義インタナショナルを卓節なペネローペ〔オディセウスの妻〕だと見做している。けれども我がインタナショナルは，彼女のように，織り上げた物を夜の間に解いてしまうために，昼間は織るようなことはしない。インタナショナルは一歩前進しそして間もなく一歩後退するような贅沢を楽しむことは出来ない。」[16]

彼は続いて，反対派が「大衆の獲得はもはや我々の最優先の課題ではない」と考えているのか，と自ら問い，そして彼らは「統一戦線戦術遂行上の誤りを批判」して，「統一戦線戦術自身を悪魔のところへ逐いやろう」と望んでいるのだ，と厳しく批判した。

第3回世界大会の間彼はドイツ代表団の会議に参加した。そこではアルトゥル・ケニヒと特にルート・フィッシャとが「左翼」の代表者として，彼らの見解を幹部会および党の多数の意見に対置した。しかしレーニンはこの討論そのものには加わらなかった。その後，大会の最中に彼にクララ・ツェトキンが会った時に，彼の考えを質ねると，彼は頭を振りながらこう答えた。

「あなた方の所の情勢では『左翼反対派』というようなものは，存在し得る。たしかに共

15) Zetkin: A. a. O., S. 34-35.
16) Ibid., S. 54.

産主義労働者党的な気分はあり得る。つまり革命的な感情を持ってはいるが，政治的には訓練されておらず，混乱しているような，不満な，苦悩する労働者たちがいるのだ。彼らには事がゆっくりとしか前進せず，世界史は急がないように思われる。」[17)]

レーニンは一方で「左翼反対派」を容赦なく批判したが，他方このようにその影響下にあった「苦悩する労働者たち」に深い同情を示した。

「彼らは世界革命のこのテムポに党指導部が責任があると考えて，そのあら探しをし，また罵るのだ。これらのことはすべてよく分かる。しかし理解できないのは，『左翼反対派』の幹部たちだ」[18)]

と言って，彼らが「『左翼である』ことは『個人的な偶然』だが，政治的には徹底した無方針だ，と見做した」が，これはまことに精密な分析であった。そのことはその後間もなく，多くの人々の目にも明らかになったことである。レーニンは続けて

「左翼とマスローとの結合は全くよくない。私はこの人物に対する私の考えを変えなかった。……いやこの反対派，この指導部は，私には全く畏敬の念を起させない。しかし，はっきりと言うが，あなた方の幹部会もまた，私にはなんの深い印象を与えない。幹部会は……この小型のデマゴーグたちを片付けることを知らない。このようなちっぽけな連中を片付け，革命的気分の労働者を彼らから引き離して，政治的に教育することは，しかし易しいことであるに違いない。まさに一方に革命的気分の労働者が存在していればこそ，他方の今のような急進主義者は，根本において最悪のひより見主義者である。」[19)]

さて再びコミンテルン第3回世界大会を場面に立ち戻ろう。彼らは「左翼」について論じ合った後に，当然のことながらドイツ共産党内の最大の批判者パウル・レヴィを話題にした。レーニンは言う

「残念乍らパウル・レヴィは，それ自体事件となってしまった。彼は自分から我々から遠ざかり，我執を通して袋小路に駆け込んだ。……あなたは私がパウル・レヴィとその能力をいかに高く評価しているかを知っている。私は彼をスイスで知り，彼に期待をかけた。彼は最悪の迫害の時代に，勇敢で，賢明で，そして犠牲を厭わぬことを実証した。たしかに彼の労働者に対する関係は冷たいと思ったが，しかしプロレタリアートとは彼は固く結び付いていた，と私は思った。(しかし) 彼のパンフレット** が刊行されて以来，私は彼を疑うようになった。私が危惧するのは，彼には強い独立性と孤立性という強い傾きがあり，少しペシミスティクであることだ。『3月行動』に対する容赦ない批判は必要であった。しかしレヴィは何をしたか。党を残酷にばらばらに切り裂いている。彼はただ一面的に誇張して，いや悪意をもって批判した。」[20)]

レーニンの批判はさらに続く。

「党がどういう方向に進み得るかについて，彼は何一つ与えていない。彼は党との連帯という精神を失わせている。隊伍を組んだ同志たちをあんなにも憤らせ，レヴィの批判のなかにある正しいものに対して，耳を聞こえなくし，目も見えぬようにしたものは，これである。……このような空気のなかでパンフレットを廻る争いが，そしてつまりレヴィの人格を廻る争いだ

17) Ibid., S. 56.
18) Ibid.
19) Ibid.
20) Ibid., S. 38.

けが，論争の対象となった。『攻勢理論家』と『左利き一味』の誤った理論と正しくない実践とが対象となる代りに……。」[21]

クララ・ツェトキンはしかしこれに反論した。

「パウル・レヴィは決して虚栄心の強い，うぬ惚れた文士ではない。彼は名誉心の強い政治的努力家でもない。彼が若くして，充分な政治的経験と深い理論的訓練なしに，党の指導を引受けたことは，彼にとって呪わしいことで，それは彼の希望ではなかった。ロザ・ルクセムブルク，カール・リープクネヒトおよびレオ・ヨギヘスの殺害後，彼は指導を引受けねばならなかったが，このことに対して彼は充分に抵抗した。これが事実である。彼がたとえ党の同志たちと充分に交わらず，孤独の人であるとしても，しかし彼が自分の持つすべての糸で労働者とともに生活していることを，私は確信している。」[22]

これは彼女のレヴィに対する心情をよく表現しているが，しかしレーニンのあの適確な批判に対する反論には全くなっていない。彼女は続いて

「悲惨な『3月行動』が彼を極めて深刻にゆり動かした。彼が固く信じたのは，3月行動が党の存在をも軽々しくてあそび，浪費したということだ。この党のためにカール，ロザ，レオそのほか多くの人々が生命を献げたのに，彼は党が失われてしまったと考えて，文字どおり泣いた。党を救うことは，ただもっとも強い手段を用いてのみ可能だ，と彼は思い，自らの命を犠牲にして祖国を救うために，開かれた深淵に自由意志で飛び込んだ，かの伝説のローマ人の気持で，彼のパンフレットを書いた。」[23]

レーニンは彼女の気持を充分察しつつ，しかも原則を明らかに示した。

「あなた方がよく知っているように，政治において問題となるのは，その意図ではなくして作用である。あなた方ドイツ人には『地獄への道は善意によって舗かれている』といったような諺があるのではないか。大会はパウル・レヴィを処断し，彼に対して厳しいであろう。これは避け難い。しかし乍らパウル・レヴィの処断は，ただ規律違反のゆえに行われるのであって，彼の基本的な政治上の立場のゆえではない。この立場が実際には正しいと認識されるその瞬間において，このことはまた可能となっているのではないか。そこでパウル・レヴィには自分から我々の所へ帰ってくる道が，広く開かれている。彼は自らこの道を閉塞したいのだろうか。彼の政治的運命は，彼の手のなかにある。彼は規律正しい共産党員として大会の決定に従い，しばらくの間は政治生活から消えねばならない。これはたしかに彼にとって大変つらいこととなろう。私は彼のことを本当に気の毒だと思う。そのことはあなたも分かるだろう。しかし私は彼にとって厳しいこの試験期間をなしで済ますことはできない。」[24]

「……彼の理論的知識には大きな欠落があり，経済学の領域では彼はまさになおマルクス主義のイロハを学んでいる生徒だ…。…我々はレヴィを失うべきではない。……我々は才能ある者に充分すぎるほど恵まれておらず，現に我々の持っている者を可能なかぎり保持せねばならぬ。……もしレヴィが規律に従うならば，それでよいのだ。——彼は例えば匿名で党の新聞に協力したり，いくつかのパンフレットを書くなどのことも出来るし，——そうして私は，3，4カ月後には，公開の手紙で彼の復権を要求するだろう。彼は火の試煉を受けるのだが，我々は

21) Ibid., S. 38-9.
22) Ibid., S. 39.
23) Ibid., S. 39-40.
24) Ibid., S. 40.

彼がこの試煉をくぐり抜けることを希望しよう。」[25]

「私はため息をついた……」[26]とクララ・ツェトキンは書いている。彼女はすでにレヴィの暗い運命を想ったが，しかし重ねてレーニンに彼を失わないで済むよう，その力を尽してくれと頼んだ。結果は既に記したようになった。レヴィに「火の試煉を受ける」力がなかったのか彼の自尊心が「試煉をくぐり抜ける」ことを妨げたのか，それともドイツ共産党幹部会が彼から受けた打撃が忘れ難いほど手痛いものであったからか。何れにしても彼らが態勢を備え合うよりも早く，レヴィはテンポを早めて党から遠ざかった。彼は永久に失われた。

クララ・ツェトキンが第3回大会後モスクワを発つ時，レーニンは別れを告げに訪れて

「あなたは，大会が原則的かつ戦術的にはパウル・レヴィの方針を取り，それにも拘らず彼を除名するのを，非論理的だと受取っている。……私はその際ただたんにレヴィの誤だけを考えているわけではなく，……なかんずくまた我々が大衆獲得の戦術を貫徹するのを，彼がいかにひどく困難にしたかについても，考えているのだ。」[27]

と更めて指摘した。これに対して彼女が次のような解決策を示したことは，注目に値する。もっともレーニンはその実現を疑ったけれども。

「彼が帝国議会議員を辞し，彼の雑誌の発行を一冊でやめる。この一冊のなかで彼はわが第3回世界大会の事業を，最高の歴史的観点から全く客観的にその価値を認める。当然のことだが，このことはこの事業に対する批判を排除しない……。」[28]

レヴィをめぐる二人の会談は，1922年10月末，コミンテルン第4回大会の際にもう一度行われた。この頃レーニンはすでに重い病気であって，彼女はほとんどそのことを期待していなかったが，彼は病気がいくらか恢復した間に，突然彼女を訪れた。彼は第3回大会の際の話合いのことを想起して，彼女のそのときの「レヴィ事件についてのお人好しの心理」をからかって，「心理学は少な目に，政治をもっと多く」と言った。

「ところであなたは，ロザ・ルクセムブルクのロシア革命に対する態度について，レヴィと論争して[29]，あなたも『心理学を少な目に，政治をもっと多く』が出来ることを示した。あなたが彼を厳しく罰したことは，充分に役立った。レヴィは，彼の最悪の敵が彼を片付けたであろうよりいっそう早く，かついっそう徹底的に，自分自身で自分を仕末してしまった。そして彼はもはや危険にはなりえない。我々にとって彼はただ社会民主党の一員にすぎず，それ以上ではない。たとえ彼がそこで恐らくはある役割を果すとしても。……しかし闘争の同志たちやロザやカールの友人にとっては，これは考え得る最悪の結果である。……けれどもまた，彼の堕落と裏切りが共産党を動揺させ，危殆に陥らしたかもしれぬ，ということもなくなった。……党はその核心において健全である。党はドイツ・プロレタリアートの指導的な革命的な大衆党に成る最良の道を歩んでいる。」[30]

このように彼はレヴィの運命を見定め，クララ・ツェトキンを励ました。

---

25) Ibid., S. 40-1.
26) Ibid., S. 41.
27) Ibid., S. 47.
28) Ibid.
29) Vgl. Zetkin, C.: Erklärung. Im: Zetkin, C.: Ausgewählte Reden u. Schriften. Bd. II, Berlin 1960, und dieselbe: Um Rosa Luxemburgs Einstellung zur russischen Revolution nach dem Novembersturz im Deutschland. Im: Ebenda, S. 383-475.
30) Zetkin: A. a. O., S. 53-4.

クララ・ツェトキンの幹部会脱退に対しては，レーニンは極めて厳しく批判した。1921年1月リヴォルノで開かれたイタリア社会党第17回大会において，コミンテルン加盟21箇条と改良主義者の排除とをめぐって激しい論争が起き，ついに党は分裂した。この問題はドイツにも波及し，彼女はレヴィ・ドイミヒ，ブラスおよびホッフマンとともにコミンテルンの方針に反対した。しかし彼らは，ドイツ共産党中央委員会会議が1921年2月22日から24日にかけて行われた時に，この問題についての採決に敗れ，幹部会員を辞任した。彼女の言葉によると「リヴォルーのイタリア社会民主主義者の大会およびコミンテルン執行委員会に対するドイツの党指導部の態度があいまいであったので，私はこれに対して俄かに示威的に幹部会から脱退することになった」[31]と言う。

「いったいあなたがどうしてあんな愚行をできたのか，私に言って欲しい。実に愚かなことだ，幹部会から逃げ出すなんて。あなたの理性をどこへやったのか。それを私はひどく憤激した。そんなに考えもなく行動し，この行動の影響も顧慮せず，一言も知らせもせず，また我々の見解を求めようともしない。なぜあなたはジノヴィエフや私に手紙をくれなかったのか。少なくとも電報くらい打つことができたではないか。」[32]

彼女は当時の情況から突然そう言う決断をしたのだ，と脱退の理由を述べたが，レーニンはこの弁解を正当のものと認めなかった。彼は彼女が「影響も顧慮せずに」行動したと非難しているが，そしてたしかに彼女の弁解をある程度認めれば，かなり心情的な動きと信じられはするが，彼女自身の「示威的に脱退」したとの言葉のように，クララ・ツェトキンがこの行動によって幹部会に影響を与えようとしたことは，疑いない。しかしレヴィのように幹部会を潰そうとかかったのではない。この区別は両者のその後の行動によって証明される。

レーニンはこのように彼女の幹部会脱退には厳しい態度をとったが，それは一つには彼は「左翼急進派」には「一片の慰め」を恵んだが，彼女にはこうしたプレゼントをする必要はないと考えたからである[33]。コミンテルン第4回大会の折りの会談においても，彼が「我々は権力の奪取，労働者の独裁，革命をやろうとするのか，然りか，否か。もし然りとすれば，今日においても昨日のように，第3回大会が指示した道以外のいかなる道もない。」[34]と強調したように，この大会の決定は彼にとっては，決してクララ・ツェトキンらとの妥協の産物ではなくして，彼の理論的確信であった。

第3回大会の基本的方針は，レーニンが彼女およびマルツァーン，ノイマンらに個人的に語ったように，また1921年7月1日の演説のなかでより明快に示したように[35]，「ただに労働者の多数のみならず，すべての被搾取者，被抑圧者の多数を我々の側に獲得する」[36]ことであった。そのゆえにこそ彼は「わが第3回大会の諸決定は，……重要な歴史的意義を持ち，事実上共産主義インタナショナルの『転換点』をなしている。それは革命的大衆党へのその発展の第1期を閉じた」[37]とまで，この大会の成果を評価したのであった。

とくに1918年11月革命以来ドイツ革命運動の発展のために活動した，ドイツ共産党幹部

31) Ibid., S. 29-30.
32) Ibid., S. 35.
33) Vgl. Ibid., S. 35.
34) Ibid., S. 55.
35) Vgl. レーニン：共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説，全集，第32巻，508ページ。
36) Zetkin, C.: Erinnerungen, S. 46.
37) Ibid., S. 48.

たちを，レーニンがいかに大切にしたかは，上の記述にも示された。ここになおクララ・ツェトキンが書き留めた彼の発言を引用して，補充しておく。彼はまず「左翼」のエルンスト・ロイター〔当時フリースラントと称した〕について

「彼は我々の間で数年間きわめて熱心によく協力した。『急進的な』ベルリンの人たちの幹部として，彼は幹部会に入らねばならぬ。……彼はいわゆる右翼とも同志的にいつしょに働くことを，『講和条約』*** のゆえに義務と感ずるであろう。私は……彼にある硬さと狭さを認めるし，これは指導者たるにはあまり適していない。そしてもし彼が動揺し，すべり出したら，もう止まる所がない」[38]

また右翼についても

「あなたは我々の旗の下に有為の同志たちを保持することが大切だ。……私はアドルフ・ホッフマン，フリッツ・ガイアー，ドイミヒ，フリースらを念頭においている。彼らを……『共産主義の純化』にとって危険なものと見做さないことである。……彼らはなかんずく党と労働者の広汎な大衆との生きた連絡のくさりである……」[39]

とも述べた。事態は彼の期待のようにはならなかったが，それはレーニンの責任ではなかった。

レーニンがこの共産主義インタナショナルにおいて，また大会の周辺において，他とは隔絶した大きな働きをなし，この大会を正しい方向に向けて，全世界の共産主義運動が，ことにドイツ労働運動がこの方向において発展すべき礎石をおいたことは，言うまでもない。彼が第4回大会に際しては，同様に大きな役割を果しながらも，すでに重病のためにその活動が妨げられていたことを思えば，第3回大会におけるレーニンについては，詳述すべきである。しかし乍ら彼の発言は日本語版レーニン全集にも収められているし，またクララ・ツェトキンとの会話は，彼女の回想記に従ってこの章の始めに紹介した。それゆえ本論文においては，この部分は省略することとする。 (1977年4月24日)

* ラーデクはドイツにおける革命運動に寄与したが，他面彼の否定的な面も指摘されている。このラーデクが1920年初めに発表された論文のなかで，「ベラ・クーンは革命的冒険主義者にはならない。……革命的指導者として存在するであろう」と肯定的評価を与えた[40]。

** Levi, Paul: Unser Weg. Wider den Putschismus. Berlin 1921 を指す。彼は3月行動のさ中にすでに執筆していたとされる。また続いて „Unser Weg“ (後に „Sowjet“) なる雑誌を刊行した。主としてこれらの行動の故に，既述のように彼は党から除名され，またコミンテルンもこの除名を承認した。

*** 第3回世界大会において，レーニンがドイツ共産党左右両翼と交した妥協は，当時比喩的に「講和条約」と呼ばれた。

38) Ibid., S. 49-50.

39) Ibid., S. 50-51.

40) Radek, K.: Die Lehren der ungerischen Revolution. In: „Die Internationale,“ 1920, Nr. 21, S. 58.